



昭和46年1月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区裏門前町5/2  
 井上重兵衛方 電(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(481)7445

### 狂言人語

あけましておめでとうございます。  
 本年は亥年、狂言には数多くの動物  
 が登場することとて、猪の一匹、二匹  
 は出て来そうなものと思ひ浮かべて見  
 ましたが、これが意外に少ないので

### 一月の催能

一月三日 新年謡初  
 一月七日 第十五回学生能と狂言の会  
 紅葉狩 宮田浩一郎 榎原 敏正  
 波辺 八尋  
 尾関 茂 石田 賢一  
 黒塚 有子 高安 滋郎  
 大浜 薫

## 謹賀新年

### 狂言共同社

昭和四十六年元旦

す。直接舞台に登場するものは勿論あ  
 りません。話題に上るものとして「く  
 じ罪人」で樞園会の山に大猪を作り、  
 仁田の四郎がまたがったところを囃そ  
 うという提案、「弓矢太郎」では憶病  
 者の太郎が今日も猪を射て来たところ  
 をぶく場面があります。また直接猪と  
 は関係ありませんが、能「鶴」では頼  
 政の従者に遠江国の住人で猪の早太の  
 名が見られます。これくらいでしょう  
 か。  
 本年もどうかよろしくお願い致しま

一月十五日 清韻会 十時始  
 卷 絹 興村 久枝 高安 滋郎  
 大野 弘之  
 通小町 長谷川 爽 西村 欽也  
 昆布売 井上松次郎 佐藤 友彦  
 一月十七日 宝生会 午後一時始  
 能三 笑 宝生 九郎  
 能桜 川 内藤 泰二 高安 滋郎  
 狂宝の笠 佐藤 友彦 井上礼之助  
 佐藤卯三郎

### 狂言解説

一月廿四日 和島。泉。野村。合同能  
 能天 鼓 和島富太郎 西村 欽也  
 能葛 城 泉 高安 滋郎  
 狂観 猿 野村又三郎 井上礼之助  
 野村武司  
 一月卅一日 梅若追善能  
 能撰 待 梅若 六郎 高安 滋郎  
 井上松次郎  
 能融 梅若 景英 西村 欽也  
 佐藤 秀雄  
 狂名取川 野村又三郎 佐藤卯三郎

六地藏は片田舎の者、六地藏を求め  
 に都へ上り、仏師を捜すところにつ  
 ぽがまんまとわたりをつめました。自  
 分を仏師だと偽ったすっぽは三人の仲  
 間を三休ずつ六地藏に仕立て上げ、代  
 価をとろうとしますが――。実力主義の  
 昆布売は北野の手水に出かけた大名  
 自身太刀を持つての道中、道連れとな  
 った昆布売りを無理矢理太刀持ちに押  
 しつけたのですが――。実力主義の  
 この時代、太刀が重要な役割を果しま  
 す。  
 宝の笠は宝を求めに都へ上った冠者  
 例によってまたまたすっぽにつかまり  
 ます。古い菅笠をとり出して蓬来の嶋  
 の隠れ笠と偽り、まんまと冠者に売り  
 つけました。喜び帰った冠者の報告に  
 主は早速着てみたのですが――。  
 観猿は狩に出た大名、出逢った猿曳  
 きの曳く猿の毛並の見事に、観の皮  
 にかけたいから皮を貸せと難題をふき

### 狂言浅深

野村 広二

かけました。背に腹はかえられず、猿  
 曳きも猿をうとうとするのですが、畜  
 生の哀しさは打たれんとする杖を取っ  
 て覚えた芸をしてみせるその姿に、大  
 名も冠者もついほろり――。  
 名取川は修業を終えて故郷へ帰る僧、  
 雅児から名前を授けられ、念を入れて  
 忘れぬ様にと衣の袖に二つの名を書付  
 けてもらいましたが、途中川を渡ると  
 て両袖の名前を流してしまいました。  
 自分の名前をすくおうとしている所へ  
 何某が通りかゝります。聞けばこの川  
 は名取川――。名取川は東北山脈に発  
 し仙台湾に注ぐ川で、珍しく舞台は東  
 北の地とみられます。

新年おめでとうございます。  
 昨年、毎年のように、多彩な年で  
 ございました。まづ万博記念能、芸術  
 祭能、これは「能における中世の愛の  
 すがた」がテーマでしたが、これに、  
 老女物・稀曲の上演、祝賀と追善能に  
 狂言会、めでたい受賞に海外能など、  
 例年におどらず、話題は豊富でした。  
 それからまづはじめに狂言や能関係で  
 鬼籍に入られた方々、名古屋では、晩  
 年評判記にも健筆を振られた故殿島若  
 人氏ほかのみなさまのご冥福をお祈り  
 したい。  
 このうち、二について申し上げる  
 と、桜間道雄氏の「検壇」復演と、  
 「卒都婆小町」の発表、芸術選奨の受  
 賞に、人間国宝指定は大層胸はずませ

ることでした。テレビで（放送はいづれもNHK）「卒都婆小町」をみましたが、先代松間金太郎氏が演じたあの「関寺小町」をいまさらのように思い出しました。故金春八条氏の古拙な至芸にくらべて、何と洗練された都会芸だったことでしょうか。しかもそれが古典のもつ佳き味と高い格調をあわせ持っていたことは申すまでもありません。この二つの流れをもつ金春流こそ能が進む一つの大道だとも思っています。よくぞここまで歩み来つたのだと感激しました。これは、いつか申し上げました金剛殿の匂いとはまた別の特色・持味と違ってさしつかえないものです。匂いと格調。能にはなくてはならない大事なものだとも思います。もちろんおもしろくみせる、わざが冴えている、明暗に富む、古格を貴ぶ、明るくてモダン、これらもそれぞれ大切なことは、いうまでもありません。それほどあの「卒都婆」から感銘をうけました。秀麗会の「野宮」以来久方ぶりの能でしたが、ほればほれるとはあのことでしょう。また新、金太郎氏も襲名直後ラジオで「八島」を放送したが、思いで深い放送として今年の記録にのこることでしよう。「卒都婆」のほか、観世鍔之丞氏の「碓」のテレビが重厚きわまりないよさを伝えていたこと、豊島弥左エ門氏の「絃上楽入・三調ノ会釈」（中日五流能）の深味にたんのうしたことをあわせ記したいとおもいます。

狂言では、野村万寿三十三回忌狂言会と三宅藤九郎古稀祝賀狂言会に、大蔵流が、式楽と狂言の会で「神楽式・鈴之段」が演ぜられました。これは奈良の春日のおんまつりに、土壇の上でおこなわれるもので、お旅所の篝火だけで演ぜられるさまはなかなか神秘的です。その上演です。三宅藤九郎氏の古稀祝賀には「翁」（喜多実）に「風流・犀ノ神之風流」がついて、「唐人相撲の上演」ともに大きな話題となった。名古屋和泉会の「木六駄」で来名どき、大蔵流では東本願寺能で、たしか鶴亀か松竹で拝見したことがありますがと話す、和泉流の中からかえつたこととはが笑顔の中からかえつてきた。そのあと話は「木六駄」の舞の伝承について、鷺流の一老人のことに話が進んでいった。そのときで「楽阿弥」（和泉保之・野村万之丞）の万之丞の謡がなかなかすばらしいと田鍋惣太郎翁は感心しておられたが、たしかに陸目に備いました。さて、ここで来名の東西の狂言師の名前を連ねると、昨年は万蔵氏のほかは、大方の顔觸れに接することができました。朝日狂言会・名古屋和泉会・やるまい会に中日五流能の舞台です。まづ「栗焼」（千作・千之丞）、「宗論」（大蔵弥太郎・忠一郎・千之丞）、「武悪」（万之丞・万作・万之介）、「右近左近」（忠一郎・千五郎）、「雷」（千五郎・忠一郎）など。上演のどれも狂言のよさをたっぷり味わせてくれました。万蔵氏には「芸能百選・悪太郎」のテレビで元氣な舞台姿に接し、あの

しや脱な、話し振りにもききほれまし。出版方面も、新著が実に目まぐるしくでた年でした。そのうち「続世阿弥新考」（番西精・わんや書店）は前著について待望の書物でした。それに名古屋・広瀬瑞弘氏の「金春と能」の力作が一昨年末上梓、京都で関西の能・狂言関係者の方々に出版記念会が開かれ、四月には仙田雪山子描く「卒都婆小町」の見事な画が贈呈されましたこともあわせ付記したいとおもいます。次に、わが三人のよき師のうち二人の方のことはを少しくお伝えしたい。まづ鎌倉隠棲のY・Y氏から昨夏いただいたたよりに添えて、東京三越落語会の番組も送っていただいた。落語会の企画もしておられるのですが、その番組にのるあいさつが「植木の裏と表」という題で、知人の息子で漫画家志望の青年が、梅の木を庭に植えていったところからはじまる。「だが、不思議と気持の落着かないわたしを発見していぶかるのだった。どうしてだらうかしばらくして女房がいった。あらこの梅、後向いているわ、と。わたし梅をみて軽く吹き出すところだった。先刻来の落着かない訳は、ここにあった。若者の画学生の美学には日本人一般にある形態美の意識がもう失われたのであるうか。そして落語にでてる植木屋のように幾時間も枝振りを眺めることはしなくとも、市井の町人が小さい植木を窓に飾るときに働かす位的美感も、時代の断絶とやらかしたのかと考えたことである」と。梅の木

賀正

ふぶや

河文

電話代表 四一三八一 番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋

電話番名代表 ②一八八〇 番

の表と裏。前と後。たとえば、鉢植の松やつつじの手入れをして枯葉をつまむとき、前後左右からみると同時に、まだそれだけでは足りない、天地からもためつすがめつ見渡さないと駄目なものです。これはまさしくあの目撃心後の市井の例ではないかとありますが、頂戴した。なつかしい師のことばである。M教授の方は、先述の世阿弥の大事なことば・花の由来について五月にいただいた手紙の文面をここで披露したい。「早速(二条)良基の連歌論書・連理秘抄を通覧いたしましたら、その中に花の論がいくつもありました。詞は花の中に花を尋ね、玉の中に玉を求むべし。姿風体はいかにも詞の花にあるべし、など。このようなことを読んでいるうちに、これらはすでに歌論でいわれていることばであることに気が付き、古今集以来の花実の問題に起源のあることを知りました。そこで久松(潜一)先生の日本文学評論史・中世篇を見ますと、花は能楽に初めて用いられたことば、歌論とは関係ないという説があるが、自分はそうは考えない、やはり起源は歌論から来ているものに相違ないとされて、古今集以来の花実思想を簡単に跡づけられ、歌論では元来花よりも実を重んじたが、新古今集は花を重んじた、正徹も新古今尊重の立場から花を重視したことを説かれ、結局これらにおいて花が芸術的美を意味することになった、世阿弥も芸術的傾向を物まね以上に重視したことは即ちこの線の上において理解されるところのことから、世阿弥の花の思想が歌論に基づくとはいわれております。今少しく詳しく考察するためにこれが連歌論、特に良基においてどのように理解されたかを考えればよろしいと大

筋が分りました」。このあと、「案外一番大切なことがあとまわしになっているように思いますが、さて私の力では俄かにまとめることもいたし兼ねます。ともかく比喩としての花の論は、日本文学の中で大変大切なものであることに変わりはないと存じます云々」です。これから花の論をお訪ねするたびに続いていきましたが、わたくしにはまさに解きがたい大公案でした。梅の木の話はM教授からもこれこそ目前心後ですわといわれましたが、その後の訪問のとき、淡淡と冷えの比較をしてきたのでそのままでと伝えて、その同異をうかがったが、これも十二月に入り、十五日の月のである日、例年の年末の用事をかねて、金剛さんの「道明寺」をみに京都行の新幹線にのった。伊吹山はよく晴れた青空の下で白く雪に化粧されて見事な容姿をみせる。能の老女がかって盛名を馳せた当時をいので語るあの詩情を浮き彫りにしたようであった。冬の田にも雪や氷が冷めたくさらさらと光る。それが用事すましてかえるときは、夕やみせまる。月はまだでない中に、語りおわつてとぼとぼと去りゆく老女の悲しい姿をみせるかのようなわびしい情景を目前にする。この日本的な風景にあの冷えの境地を見出したが、これは枯淡とはいえない。枯淡は京の寺々の庭にあるのではないかと。M教授からうかがった異同とおなじものをみつめて、車中に深々と肩を落して、しばらく得なかつた安らぎをおぼえた。金剛能楽堂では北岸佑吉・中村保雄・松常太郎の諸氏にあう。北岸・中村両氏とは春日のおんまつりや、四天王寺の「探桑老」の公演などいろいろの話をかわす。六角堂で鳩にえさをやり、お堂を一まわり

してから、池ノ坊の立花を、門越しにのぞきみるのもいつものとおりであった。さて、昨年の名古屋は例年におとらず狂言も能もさかんにおこなわれた。狂言共同社の終始活躍はいうまでもない。「道成寺」が梅田邦久・内藤泰二両氏で見事に舞われた。女性も熱心、学生諸君の研究熱も高く、薪金、義援金募集能・乱能も昨年のように無事おこなわれた。青年楽師グループ能も活発であった。

年末の放送は、「邯鄲」(後藤得三)「教養特集・地方に生きる伝統芸能」と狂言。昨年はカラーテレビの狂言や能を契によくみた。十指に余ろう。

本は「芭蕉の本・風雅のまこと」(小西甚一編・第七巻・角川書店)「日本人とことろ」(道成寺考ほか・再刊・保田与重郎・読売選書)「故市川三喜博士の謡曲・俳句の英訳」(嶺卓二、英語青年七月市川博士追悼特集号)。

週刊朝日の「女人平家」(吉屋信子)には徳(子)姫が登場する。

今年の名古屋の能界の方々には、健康に留意と古典芸能への広い関心を持たれるようお願いしたい。今年も精彩を放つ行事の展開をみなさまとともに祈りましょう。

### 玄象紛失

西村弘敬

謡曲にある玄象(或は弦上)は古今の名器として有名なものであります。之れは人皇五十四代仁明天皇の御宇に狩部頭貞敏(かものかみていびん)といふ人が大唐に渡り、琵琶の博士廉承武より秘曲を授かり、帰朝の際に玄

象、獅子丸、青山と三面の琵琶を譲り受けて持帰りし時、海上が非常に荒れて船が沈没せんとする危険に逢ひ、止むなく獅子丸一面を海中に沈め竜神の怒りをなだめ、辛ふじて帰国する事が出来た。其後玄象、青山二面は宮中の秘宝として保管せられて居り、其の内青山は去る子細あって仁和寺守覚法親王の許へ遺はされ、玄象のみ宮中に秘蔵せられた。然るに村上天皇の御宇にどうした事か名器玄象が紛失するといふ大事件が出来ました。天皇は太く歎かせ給ひ我が代に重代の秘宝を失ふ事は何共遺憾千萬とて日夜悲しませ給ふた。

然る所ここに延喜の帝の御孫に当る人にて、三位源博雅と申す人―これは蟬丸の能に間狂言の役にて出る博雅の三位の事―此の人は管弦の道殊に琵琶にも堪能なる人であったが、玄象が紛失したる由を聞き早速清涼殿に参上して、夜になり人の静まった後に、南の方角から玄象の弾く音が聞こえて来たが、若しや聞き違へではあるまいかとよくよく聞くに、正しく玄象の音なるにより直ちに小者一人を供として南の方へと行き朱雀門も過ぎ、朱雀大路を南の方へと、遂に羅生門へと行きついた。良く良く聞くに門の楼上にて弾くのが判った。博雅は大声にて玄象が失せて天皇が太く悲しませ給ふ故、速かに返し給へと呼ばはりたれば、天上より玄象の琵琶に繩をつけておろして来たので、喜んで取返し内裏へ持ち帰りて天皇に斯くと奏上した、天皇も太く御悦び「鬼の取りたるならん」と仰せ

られて以来一層大切に御保存ありたるとの事である。此の玄象は名器でもあり、又靈器でもあったとの事で、生きたるもの様で抽く弾く人には腹立てて音が出です、又塵が積れば良く塵を拭はざれば鳴らず其気色が誠にうつつに見えた。又一と時内裏に火災起りたる時に誰も持ち出さぬのに、玄象自然に庭に出てあつた等誠に奇瑞の多い名器であつたと今昔物語第廿四卷の第廿四段に記されて居る。

二月の予告

二月七日 青陽会

能 賀 茂 観世 武雄 高安 滋郎

能 東 北 加藤丈太郎 西村 欽也

能 阿 漕 塚本 秀雄 高安 滋郎

能 腰 折 佐藤卯三郎 井上礼之助

能 研究能 田村 友彦

二月十一日 梗雲会

能 竹生 嶋 高田 甚六 西村 欽也

能 草紙洗 葛原 正枝 高安 滋郎

能 狂 いるは 井上 豊弘 井上松次郎

二月十四日 観世会

能 弱法師 観世 喜之 西村 弘敬

能 双紙洗 観世 元正 高安 滋郎

能 間 佐藤卯三郎

二月廿八日 たなびき会

能 野 守 観世 元昭 西村 欽也

能 末 広 井上松次郎 井上礼之助

能 卷 絹 龍沢思美子 西村 欽也

能 声 川 梅若 猶義 高安 滋郎

能 融 梅若 修一 高安 滋郎

能 井 礪 佐藤卯三郎 井上松次郎

能 能楽協会名古屋支部よりおしらせ

旧冬十二月廿日催しました歳末助け合い

義捐能は残額を左記の通りそれぞれ県、

市へ寄託致しました。

各位の絶大なる御協力を感謝致しますと

共に多大なる成果をあげ得た事御同慶に

たへません。

愛知県 拾五萬五千四百廿円

名古屋市 拾五萬五千四百廿円



新年賀謹

一 河村 鉦二 会

藤 加藤 良久 会

長 鬼頭 八郎 会

中 前田 昌広 会

竜 藤田 六郎兵衛 会

観 衛 会

霞 田鍋 惣太郎 会

潤 林 甲子夫 会

観 野 崎 太郎 会

観 久田 秀雄 会

高 高安 滋郎 会

た なびき 会

内 藤 泰二 会

調 友 会

名 田鍋 惣太郎 会

名古屋能楽俱樂部

風 殿島 修二 会

幸 福井 啓次郎 会

金 片野 東四郎 会

掬 柴田 初太郎 会

曲 増田 一雄 会

春 山田 仁三郎 会

正 加藤 丈太郎 会

松 佐藤 太俊 会

清 大塚 一 会

青 協能楽 名古屋支部 会

名古屋 和泉 会

狂言 共同 社

支部長 田鍋惣太郎

名古屋 和泉 会

狂言 共同 社

(イロハ順)



昭和46年2月1日発行  
発行所  
名古屋市中区表門前町5/2  
井上重兵衛方 電(321)1430  
名古屋狂言共闘社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電 481)7445

狂言人語

暖かい日が続きます。おだやかな陽の光がふりそそぐ午後など、ふともう春ではないかと覚えるほど。でも寒さはこれから。恒例の二月堂「お水取」の声を聞くまでは、まだ「春遠し」です。

さて年明けて悲しい出来事は喜多六平太翁の逝かれたこと。明治、大正、昭和の三代、その九十六年の生涯を能楽一筋に生き抜いてこられた翁——巨星墜つ——慎しんでご冥福を祈ります代って明るい話題を一つ、CBCクラブ第十二回文化賞(くちなし賞)に高安流長老西村弘敬氏が選ばれました昨秋より健康上の都合で舞台から遠ざかって居られましたが、氏のあの端正で厳しい協働姿が見られるのももうすぐです。今回の受賞をよろこばせていただくとともに、一日も早くお元気な姿に舞台でお目にかかれる日をお待ちしております。

二月の催能

二月七日 青陽会  
賀 茂 鶴世 武雄 高安 滋郎  
井上松次郎

能東	北	加藤丈太郎	西村 欽也
能阿	漕	塚本 秀雄	高安 滋郎
能腰	祈	佐藤卯三郎	井上礼之助
能研究能	田村 高橋 藤一	佐藤 友彦	大野 弘之
二月十一日	櫻雲会		
能竹	生嶋	高田 真六	西村 欽也
能草	紙洗	葛原 正技	高安 滋郎
能	井上礼之助	井上松次郎	
能	井上 豊弘	井上松次郎	
能	二月十四日	観世会	
能	弱法師	観世 喜之	西村 弘敬
能	双紙洗	観世 元正	高安 滋郎
能	野 守	佐藤卯三郎	西村 欽也
能	末 広	井上松次郎	井上礼之助
能	二月廿一日	梅嶺会 十一時始	
能	卷 絹	熊次恵美子	西村 欽也
能	芦 刈	梅若 猶義	高安 滋郎
能		大野 弘之	

狂言解説

腰祈修行を無事に終え、久方振り山をおりた山伏、百歳に余る祖父をたずねました。腰の曲って不自由そうな祖父の腰を伸ばさんと、早速おぼえた祈りを披露しますが……。  
いろはを二そろろ文字の勉強を始めんとする親子、いろはは四十七文字を口写しに子供に教え込もうとするのです。が忠実に真似る子供にとり親が腹を立ててしまいます……。  
末広川を渡らんとする座頭二人、冠者、またすっぱにぬかれ古傘を売りつけられて来ました。立腹した主の機嫌をなおそうと冠者は懸命に囃し物を囃し始めました……。  
井福川を渡らんとする座頭二人、渡り瀬を知ろうと石を水面に投げます。どぶ(水面)かっちり(水底に当る)——則ちこの曲名の由来です。これを見た目明きが座頭をからかい始めます。

狂言念々

一月十七日、今年はじめて熱田能楽殿へでかける。宝生会初会。能は「三笑」(宝生九郎ほか)、狂言は「宝の笠」(卯・友彦・礼)。「三笑」ははじめてみる。清潔で地味なうちに明るさがただよ。直面の舞台である。数年前、ざくろ三つを程よく描いた色紙を求めたが、きれいなにはじて紅い爽のみえるざくろ三つに「三笑」の二字が書き添えられて、能のこの曲を暗示するかのようでおもしろかった。画家の名前はいまちょっと思い出せない。九郎氏と、東京の正月は雪が降りましたなどの対話のなかで、この曲が終戦後をはじめたそうですとのことばがあった。狂言は着実な演技に好感が持った。名古屋能界で八十才を越す数人の一人、卯三郎氏は元氣であった。今年暖かいのか、毎年在所からもらう年末の梅の枝がもう上旬にひらきはじめる。鉢植えはまだ固いのだが、うぐいすも七日早朝、きたような気がした。梅といえば、週刊新潮(一・二三)の小倉遊亀さんの「古董紅梅」の絵は美しい。正月の放送は、今年の「翁」は金剛流。狂言はテレビで「靱猿」(千作ほか)小舞・鮎(大藏弥太郎)「蝸牛」(藤九郎・保之)をみ、「附子」(万藏ほか)小謡・田植(万作)「左渡狐」(忠一郎ほか)をきく。二日の日には、まづ谷川徹三先生の「感覚の文化」(一九三八)を家内にもよんできかせる。「感覚の文化」はあらゆる文化の基礎である以下第三節はことにゆっくりよむ。次は土岐善麿氏の「斜面逃禅記」から「もちの味」を。第三は「申楽談義」の一節「どっといふ位」など二・三。そのあとはいつものように乱続になり、ひとり、手許に

おいたウオルター・ペーターの「ジョルジョーネ派」&「道元禪師画伝」(大法輪、四五・十一)、「醒睡笑」をひらいて「会下僧」「つれづれ草」(巻之三)のあたりをよむころは、もうやめて酒にしようということになっていった。なお三宅藤九郎氏から亥年の小舞謡をおくられる。「ころころと丸く太った/その体/頸は短かく目は小く/興がるていに見ゆれども/犬歯は外へ突出でて/怒れるときは逆毛立て/敵に向うてまっしぐら/猪武者とは申し候」である。楽しいしらせは西村弘敬氏のCBCクラブ文化賞受賞の報(十九日)、それにひきかえ、悲報は喜多六平多翁の他界。一月十一日永眠とうけたまわる。あのメガネをつけ、長い羽織と葉巻をくゆらせる翁の姿をもう目前にすることはできない。

かつて、十五年、当時の新京(現・長春)の放送局で放送をお願いした。地下一階のスタジオまで長い廊下を付き添うとき、まるで、わたくしのかえりをまつ父といつしよに歩いているような感じがして仕方がなかった。満鉄俱樂部であのすばらしさを披露した翌日のことであった。ご願福をお祈りしたい。放送は、「鉢木」(鏡之丞)と「松垣」(桜間道雄)、放送はいづれもNHK。本のは次号で。

「鬼の皿」

先に本紙一二四号「山伏狂言」で山伏の呪文について触れたが、その内で「天理本」にあらわれた「一りけんじ

よ」の文句に関連して述べたい。「一りけんじよ」は「しよりけんじよ」(草履けんじよ)を導くための数え唱として子供達にとり入れられ、さらにこれを狂言の山伏が呪文に拝借したものと考えられるが、今日も各地に草履とり、草履かくしの童謡として各地に同系統のものを残している。(佐竹昭広「下剋上の文学」—嘲笑の呪文」参照)

ところでこのもとうたと思われるのが例の「徒然草野槌」に見られる鎌倉時代の唱歌であるが(本紙一二四号参照)、この唱はかなり広く流布し、様々な形で伝承したらしく、「一りけんじよ」もその内の一つと考えられる。こゝでその内の一つとして「牛馬間」(巻一)にあらわれた「鬼の皿」という遊びを紹介する。

(林羅山に)堀田加州尋て曰く重部共の遊びに、友を集て左右の手を寄てかぞへ、鬼の皿という事をす、その計へ詞に、(ダイドノ)ダイガ娘ハ、梶原、アメウジ官が杖ヲ突テ通ル處ヲ、去ハヨッテ終ノケ、という、是も又故ある事にや、(羅山)答て是は頼朝卿の御時、御意に叶ひ、出頭して威を振ひたる人をかぞへ立たる也、其子細は、一にダイドノとは御台所政子の御方なり、一も台殿、二も台殿にて、統てがぞふべきものなしといふ義にて、台殿々々とかさね呼也、台がむすめとは、頼朝の大姫清水冠者の北の方をいふ、是又寵愛の姫にて、威勢有、次に梶原とは平三景時也、次にアメウジとは安明寺とて、北条時政の妻牧の御方の一族なるが、盲人と成て頼朝の御咄し相手と成御伽し、御免にて座席も杖を突て歩行す、安明寺に行逢ふものは、傍に寄て通す故、去は終に

退とは云なるべし(以下略)これによるとおそらくこの「鬼の皿」という遊びは「鬼えらび」の一種と考えられるが、或いは今日も地方によっては残存していることが十分考えられる。「徒然草野槌」にあらわれた謡歌は色々な流れを作り、「一りけんじよ」部分はやがて「しよりけんじよ」を伴い、草履とりの遊びに用いられたが、その他にも子供達の遊びに次第に結びついて、こゝにあらわれる「鬼の皿」のように広く謡われ、伝承されて行ったものと考えられよう。

三月の予告

(鈍太郎)

- 三月 七日 九阜会
  - 前花 月田中きんこ 高安 滋郎
  - 間 佐藤 友彦
- 三月 十四日 大蔵流狂言会
  - 前清 経 森川みどり 西村 欽也
  - 半能融 観世 喜之 高安 滋郎
  - 狂舎 弟 井上礼之助 井上松次郎
- 三月 廿一日 長生会
  - 前羽 衣菊地 郁子 高安 滋郎
  - 前三 輪内田 藤 西村 欽也
  - 間 佐藤 友彦
  - 半能融 伊藤 長八 西村 弘敬
  - 狂口 真以 井上松次郎 井上礼之助 佐藤 秀雄

重要無形文化財

第十六回 中日五流能

昭和四十六年三月二十八日(日) 名古屋 中日劇場

第一部 (午前十時開演)

- 近藤 乾三
- 景 清 松本 謙三 安福 春雄 杉 市太郎
- 松門之会 幸 祥光
- 三輪 柴田初太郎 遊行柳 大西 信久
- 玉之段 高橋 進
- 狂 文荷 三宅藤九郎
- 梅若万三郎

三井寺

- 無俳之伝 吉田太一郎 藤田六郎兵衛
- 北村 一郎
- 仕舞 鶴之段 金春栄治郎 邯鄲 辰巳 孝
- 一調 桜川 野口 禄久 田鍋惣太郎
- 金春 信高

天

- 盤 敦 久保田千三郎 谷口喜代三 金春惣右エ門 大倉長十郎 森田 光春
- 附祝言

弱法師

- 友枝喜久夫 安福 春雄
- 松本 謙三 北村 一郎 森田 光春
- 舞入
- 一調 善知鳥 林 喜右工門 幸 祥光
- 仕舞 笠之段 豊島弥左工門 忠度 梅若万紀夫
- 野守 栗谷新太郎
- 梅若 盛義

二人静

- 梅若 盛義 吉田太一郎 杉 市太郎
- 久保田千三郎 大倉長十郎
- 仕舞 土筆 善竹忠一郎
- 仕舞 鉄 輪 藤井 久雄 熊坂 片山博太郎
- 金剛 巖

春日竜神

- 高安 滋郎 谷口喜代三 金春惣右エ門 曾和 博朗 森田 光春
- 附祝言

主権

- 中日新聞
- 後授 文 化 新 聞 庁

一部 入場料 特二、九〇〇円 A、二、三〇〇円 B、一、九〇〇円 C、八〇〇円  
前売券発売所 名古屋市内アレイガイド、八〇〇円  
能楽師宅 中日新聞文化事業部



狂言人語

山の三月 東風吹いて  
どこかで春が 生まれてる

春はいつも私達の気づかないうちにやってくる。暦の上で春を迎えたのに吹く風は冷たく、春を待ちわびながらオーバーの袴を立ててふるえている時、たいてい春は片隅にひっそりと息づいており、私達がそれと気付く時には、すでに春はそこら中にあふれているものです。神宮拝殿前の手水の水も心なしかぬるみ、木々の小鳥のさえずりも春の訪れを告げるようです。

さて春三月恒例の「中日五流能」毎回五流の名匠を一堂に集め、豪華な番組で繰り上げられるこの催しは、すでに十六回を数え、毎年私達が春の訪れとともに心待ちにしているものです大いに期待しましょう。

もう一つ、当地狂言界今月の話題はこの十四日に「大蔵流狂言会」が第一回名古屋会として開催されることです。当地狂言界は和泉流が中心で、これまで大蔵流の狂言に触れる機会が少なかったものですが、この催しを礎石として当地に是非とも根をおろしてもらいたいものです。

Table with columns for dates (March 7, 14, 21, 28) and names of performers and their roles. Includes names like 田中きんこ, 高安 滋郎, 西村 欽也, etc.

昭和46年3月1日発行  
発行所  
名古屋市中区奥門前町5/2  
井上重兵衛方 電(321)1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言解説

舎弟 兄を訪れる度に「や・て・い・(舎弟)」と呼ばれる男、し・や・て・い・の意味がわからず知人に尋ねに来ました。教え手は後の笑い草にしようと、し・や・て・い・は盗人のことだと教えたからさあ怒った弟はその足で兄の許へかけつけます。

口真似 去る所から見事な樽肴を貰った主、太郎冠者に云いつけて酒の相手をさがしにやりました。ところが疎忽者の冠者が連れて来たのは近所でも評判の酒乱の男、何とか追い帰そうと主は一計を案じ、太郎冠者に自分の口真似をするよう云いつけます。

文 荷 荷に文の使いに使された二人の冠者、とへ文の使いに使された二人の冠者、替り／＼に文を持ち、果ては二人で肩荷にして行くのですがどうにも重くてもたれませんか。あまりの不審さにととう文を開いてしまします。恋の重荷は重いが道理、中には綿々と重いものが書き連ねてありました。

土 筆 春の野に連れ立って遊びに出かけた二人の男、花を見てはまたつくしを見ては珍妙な古歌をひき、挙句の果てはおきまりの相撲になります。春の明るい野辺の様子、野遊びの楽しさを想い起させる佳品です。和泉流では題を「歌争」としています。

狂言念々

野村広二

二月中旬、雨の降る日、ガラス戸越しに春のくるのをしらせるようにしづかに降る雨をいつまでもながめる。十六日には、緑先をぬらす南風の雨がけいしい音をたてる。ふくらんだ梅や桜の蕾が毎日のように野鳥についはまれる。前号で故六平太翁が六平多翁になつていたのでお詫びして訂正します。この頃わづかなながら手許にある記録や資料を少しづつよみかえす。真っ先に住任坐臥の名著「六平太芸談」からはじめ。大小の美しい貝殻を沢山あつめたような本です。このなかの「山姥」のことは実にうつくしい。前後するけれども、本の名前をあげると、「演能手記」「演能前後」(ともに喜多夷)「沼津雨能評集」(二十番ほど、昭・六の隅田川から昭三の羽衣まで)「現代の能」(丸岡明、喜多六平太の鶯鷓小町ほか)「謡曲界」(昭十七、十一、世阿弥五百年祭特集、葵上の写真・杉本藤次郎撮影)「私の思い出」(松野泰風、喜多六平太の項)「新修能楽全書・第五巻」(六・兼・革・司會)「襄の三長老座談会、問狂言のこと」も「現代語訳日本古典文学全集・世阿弥編」(小西甚一、六平太と花・非風・関位)「能」(丸岡大二・吉越立雄、清経)「名古屋の明治・大正・昭和の演能記録」(田鍋惣太郎編)「田鍋惣太郎小鼓芸談」など、能は東京で、「弱法師」のときは「鶯鷓小町」(宝生九郎)。「石橋」元正、元昭)







昭和46年4月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町6/2  
井上重兵衛方 電話(321)1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電話(481)7445

狂言人語

固かった桜のつぼみもふくらみ始めました。能楽殿に通う楽しみもまた一つ、楽殿の四囲の桜の若木に足をとめ次の来観の時には——と心嬉しく感ぜられることです。

さて今月は珍しく「道成寺」が続けて上演されます。乱拍子——小鼓の気合とシテの押し殺された執念の一騎打やがて堰を切った様な静から動への急転——急の舞、観衆の緊張は最高に押し上げられての鐘入り——能の楽しさを絵に描いた様に満喫させてくれるでしょう。シテ方はもちろん、ワキ方囃子方、間狂言、さらには後見まで秘事口伝に満ち、重い習曲とされております。ぜひ御鑑賞下さい。

四月の催能

四月 四日 竜吟会  
四月十一日 観正会  
能 道成寺 上田 照也 高安 滋郎  
間 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄  
能 正 尊 久田 秀雄 西村 欽也  
間 大野 弘之  
狂 呂 蓮 井上礼之助 井上松次郎 佐藤 友彦

四月十七日 猶 飄会  
能 道成寺 杉田 合子 宝生 弥一  
間 佐藤卯三郎 井上礼之助

四月十八日 観 世会  
能 俊 寛 山本 博之 市場 豊久  
間 井上松次郎

能 富士太鼓 武田太加志 西村 欽也  
間 大野 弘之 高安 滋郎

能 融 観世鎮之丞 高安 滋郎  
間 佐藤 秀雄

狂 入間川 佐藤卯三郎 井上礼之助 佐藤 友彦  
四月廿五日 清 韻会  
能 郡 廓 泉 嘉夫 高安 滋郎  
間 佐藤 秀雄

能 百 萬 大槻 秀夫 西村 欽也  
間 井上松次郎

能 殺生石 殿島 修二 西村 欽也  
間 佐藤卯三郎

狂 萩大名 野村又三郎 井上礼之助 佐藤 友彦  
四月廿九日 幸 友会

狂言解説

呂 蓮——一夜の宿を頼んだ出家、宿の亭主に頼まれ、弟子として剃髪し戒名を授けてやった所へ亭主の女房が現れます。坊主嫌いの女房の陰謀に俄道心の亭主は恐れをなし、罪を坊主にかぶせてしまいます。

入間川——永の在京の後、故郷へ下る大名、とある川のほとりへ出ました。川の名を問うと入間川、渡り瀬はずつと川上だと教えられた大名、何を感違いましたか、ザンブと深みにとび込んでしまいます。

萩大名——太郎冠者のすゝめで清水へ遊山に出かけた大名、腰掛けた茶屋の庭先の自慢の宮城野の萩を見て一首詠むことになりました。大名は冠者に教えられた通りよもうとしましたが——。

狂言念々

野村 広二

三月二十五日、某所で、名古屋和泉会発起人の一人、高木市之助老博士にお目にかかる、いつものように、お妹様付き添いで、お元氣な様子になにより、二十八日の中日五流能は初番の「景清」(近藤乾三)がみたいとかくしやくたるところを示された。

ほかに、この頃旅行でたづねられた下田の椿のきれいであったこと、朝寝坊でうぐいすの声は余りきかないことなど告げられる。椿の話では、遠くをみやる老先生の目が、老いの情熱をたえて、なごやかに光っているように導くみえた。春らしい空にまだ葉のない木々が何となくぼつとあかくまたうす緑に遠見できる日であった。春といえは朝日の日曜版の滝平二郎氏の童面のきりえはまことに印象的。二月の二十一日号の梅や次号の桃など特に出色である。三月は大蔵狂言会・なごや会をみる。巾の広い愛好者として東西

伊勢などの各地で舞台にで。またつとめている人達のおつまり。若い外人の狂言をいれて十二番の狂言。礼儀正しくよく呑みこみ、清潔で、何よりも心構えのしっかりしていることが、ほほえましい光景を随所に展開させた。そして女性の手にひるがえす扇の色が美しく目にしみる。心地よい会で、善竹長徳(玄三郎息)君が「千鳥」にまた大蔵基嗣、基義兄弟の両君は「悪坊」に賛助出演。まじめですなおな態度がともよい。いつしよにみていた作り物の太田一三老人のお孫さん二人のうち、九つになる姉さんに「楽阿弥」「子の日」や「二人袴」の説明をする。これも話すのはむづかしいが、小舞も狂言もよくわかるらしい。二階の喫茶室では佐藤友彦氏の長男融君と、こどもの世界に入りこむ。やがては融君もサルの役で舞台をふむのだと可愛い目を見ながらもきびしいものを感じる。楽屋では、基義君となくなられた祖父の弥五郎翁がかって「楽阿弥」を舞われたときの尺八をいただいた思い出を話す。青少年、わらべのことばかり語ったが、もう一つ心にしみる話を。それは、「観世」の二、三月号に故観世左近氏未亡人佳子さまを囲む座談会が、左近三十三回忌追善特集で。その三月号の、桂子さまが戦災で向山のお宅を焼かれ、わかい元正氏をつれ、鍬之丞、静夫、山階信弘諸氏の付き添いで逃げられるときを語られたことばです。「元昭は学童疎開中です。元正がお母さん、昭ちゃんがいなくて良かったねと言いました云々」はいまにいたるまで兄弟の仲のよさを示して余りあ

る珠玉のことばとおもいます。なお二十六日、岐阜県、能郷(のうごお)の能楽狂言が記録作成措置の国の無形文化財に選ばれる。かつてNHK放送文化財の録音に山路をたどったことがある。本田安次、北岸佑吉、横道万里雄の諸氏と奉納のお旅所や宿所です。よだった記憶はいまでもあたらしい。

放送は「弱法師」(近藤乾三)、「杜若」(友枝喜久夫)をきき、「放下僧」(後藤得三、いづれもNHK)をみ、「河東節」「道成寺」(山彦河原ほか、解説、町田佳声、CBC)をきく本は「金剛」(八十号、檀風上演、曲名統一ほか、寄贈)、「金春」(二十五号、老女物は何故大事か、桜間道雄ほか、寄贈)、「芸の心」(吉住慈恭、毎日、二人腕久の筒井筒のことほか)など。

### 三条大黒屋

太郎冠者は主命によりしばし都へ買物に上る。きまわってすっぱにぬかれてまやかし物を売りつけられるのだが代金の支払にその多くは

代物は三条の大黒屋で渡しませう  
大黒屋存じている。あれで受取る  
でおりやらう

これで売買契約が成立する。――さてよ、万疋もする宝を路傍で行きずりの男に売りつけてこんなことで大丈夫だらうか、ひよっとすると太郎冠者の方が一枚上手かもしれないぞ――。

実はこんな心配は枝葉末節、狂言鑑賞には不要であり、破局の後に妻に「食い裂こうか引き裂こうか」と追い

込まれた夫を心配する必要がないのと同様、どうでもよいことなのである。現に大蔵流の現行曲では代金を渡すに關してのやりとりはすべて削除されて見当らない。とはいふものの不自然さに残る。仕方がない。少し狂言がいきのために立入って見よう。

今日現行曲ではすべて「三条大黒屋」に統一されているが、少しさかのぼると他にも次の様な名前が見つかる。

三条丹波屋(波形本「若和布」)

三条布袋屋(狂言記「末広がり」)

三条もがり屋(虎明本「末広がり」)

このうち三条丹波屋については「天理本・若和布」に、師匠からわかめを求めて来る様云付けられた新発意、

同「畏タト云テ代物ハなんと仕らふゾト云 師いつもみやこからさいさい愛へまわるゝ旦那があるヲしらぬかと云 同中存タト云

師ナニ成共京テかい物があらば、代を取かへてくれうといわるゝやくそくじや三条で丹波やと云、それてわたせト云、

こう説明されるとなるほどとうなづけるが、寺と壇家の關係で必ずしも一般的ではない。そこでもう一歩さかのぼり「天正本・宝買」をみると

打でのごつちかひにやる、かわりは車宿にあるとゆふ、のぼる、

とあり、これによればおそらく大名が上京時に車を寄せる常宿と思われる。つまり両替屋等の金融機関の末だ整備されない時代にあつては、車宿などで常客に対してはそうした役割を果たしていたことは充分考えられる。大黒屋、

ほいてい屋、もがり屋等も本業は別にあつたかもしれぬが、常客、得意先に對しては金融機関としての機能をも合せ

行っていたものであろう。

(鈍太郎)

### 五月の予告

五月 二日 やるまい会 午後三時始

五月 三日 豊屋会

五月 五日 巽会 戸田あさ刀自米寿祝賀

五月 五日 河野 邦男 西村 欽也

五月 五日 植村 本子

五月 五日 高木富妙子 高安 滋郎

五月 五日 玉井 弘子 井上礼之助

五月 五日 井上松次郎 高安 滋郎

五月 五日 佐藤 秀雄

五月 九日 柳水会

五月 九日 万屋昭三郎 高安 滋郎

五月 九日 深見 真澄

五月 十六日 邦語会

五月 十六日 梅田 邦久 高安 滋郎

五月 十六日 井上松次郎

五月 廿三日 田鍋惣太郎師米寿記念

五月 廿三日 離子会

五月 廿三日 鳳鳴会 離子会

五月 廿九日 一謡会

五月 卅日 田鍋惣太郎師米寿記念

五月 卅日 喜多 実 高安 滋郎

五月 卅日 佐藤卯三郎

五月 卅日 大西 信久 福王茂十郎

五月 卅日 井上松次郎 井上礼之助

五月 卅日 三宅藤九郎 和泉 保之

酒 味 贈 商  
た ま り 食 料 品

## む と う 食 品 店

名古屋市昭和区川名本町1の10

電話 〇二一六六番



昭和46年5月1日発行  
発行所  
名古屋市中区裏門前町6/2  
井上重兵衛 電話(321)1430  
名古屋狂言共闘社  
印刷所  
有限会社安井印刷所 電話(481)7445

狂言人語

青葉の目に染む候となりました。公害のやかましく云われる都会の空の下にも、五月となれば鯉のぼりがひるがえり、木々の若葉青葉はせいじっぱいに腕を拡げてくれます。季節を偽ることない自然に対し、私達も精一杯報いなければならぬでしょう。青葉の映える太陽と青い空を一日も早く取り戻したいものです。

さて五月のゴールデンウィークは催しも盛りだくさん、特に二日は「やるまい会」が開かれます。野村万之丞、万作、万之介の三氏と大蔵流茂山千五郎、千之丞、善竹十郎の三氏を迎えての豪華な催しです。さらに五月末から六月にかけては名古屋能楽界の最長老田鍋惣太郎氏の米寿記念会が日数能として豪華に企画されており、どうか御期待下さい。

五月の催能

- 五月 二日 やるまい会 午後三時始
- 雁 大名 野村万之丞 野村万之丞
- 井上礼之助
- 狂 棒 縛 茂山千五郎 善竹十郎
- 茂山千之丞

- 狂 通 円 野村又三郎 井上松次郎
- 鬼頭秀治
- 狂 鎌 腹 野村万之丞 野村又三郎
- 野村万作
- 井上礼之助
- 狂 茸 野村 万作 野村万之丞
- 五月 三日 豊星会
- 五月 五日 巽会 戸田あき刀自米寿祝賀
- 五月 五日 河野邦男 西村 欽也
- 五月 五日 植村 本字
- 五月 五日 井上松次郎
- 五月 五日 高木富妙子 高安 滋郎
- 五月 五日 玉井 弘子
- 五月 五日 井上礼之助
- 五月 五日 佐藤卯三郎
- 五月 五日 佐藤 秀雄
- 五月 九日 柳水会 高安 滋郎
- 五月 九日 万屋昭三郎
- 五月 九日 深見 真澄
- 五月 九日 佐藤卯三郎
- 五月 十六日 邦語会 高安 滋郎
- 五月 十六日 梅田 邦久
- 五月 十六日 井上松次郎
- 五月 廿三日 田鍋惣太郎米寿記念 離子会
- 五月 廿三日 鳳鳴会 離子会
- 五月 廿三日 一謡会
- 五月 廿九日 村木寿恵子 高安 滋郎
- 五月 廿九日 佐藤 友彦
- 五月 卅日 田鍋惣太郎米寿記念会
- 五月 卅日 喜多 爽 高安 滋郎
- 五月 卅日 佐藤卯三郎
- 能 道成寺 大西 信久 福王茂十郎
- 能 間 井上松次郎 井上礼之助
- 能 間 三宅藤九郎 和泉 保之

狂言解説

雁大名古くは「雁盗人」と呼ばれていました。この方がよく曲名を表わしてあります。永の在京の大名、園許へ帰らんと別れの宴を計画し、酒の肴に初雁を求めんとしましたが、あいにく代りがありません。一計を案じた主従は店頭で一芝居打ち、まんまと初雁をかすめました……。

棒 縛 主の留守にはきまわって盗み酒をする二人の冠者、今日は謀って一人を棒縛り、今一人を後手に縛って主は外出しました。所が飲みたい一心の二人はその不自由を克服しまんまと酒宴を始めます……。

通 円 珍しい舞狂言です。脇唄が登場し、宇治の平等院で茶坊主の居ない茶席に手向けられた茶湯を不審に思い門前の者に尋ねると……能がかりで演ぜられるこの狂言は謡曲「頼政」の謡の文句をもじったものです。

鎌 腹 逃げ転びながら舞台上に登場する男と、棒を振りかざして追いかける女、間にわって入った仲裁人、この幕開けの場面はいかにこの狂言にふさわしいものです。当節はやりの腹かききって死ぬと見えきった男の、鎌をかかえての腹切りは……。

茸 庭に奇怪な茸(きのこ)が生え、気味悪かった男は山伏に祈り除けて貰おうとしましたが……舞台一杯に茸の生え並んだ様は見ものでしょう。

歌 争 野遊びに出た二人の男、花や土筆を見つけては珍妙な古歌をひきついにはおさまりのとくみあいが始まります。

金 岡 実在する巨勢金岡の名を借りた狂言。或る高貴な女性に心を奪わ

れた金岡の物狂、それをみかねた妻が自分の顔を腕に覚えの絵筆で彩色せよと進んで提案しました。妻の顔に絵筆を運ぶのですが……。

狂言念々

野村 広二

四月二十五日朝、狂言「薩摩守」(千作ほか)をきく。住綱。この日は京都(金剛)と奈良(金春)の能会に招かれていたが、家事都合で行けなくなつた。縁の古都や佐保川界隈、奈良盆地に昔なつかしい記憶をただあらたにするだけであつた。用事の合間をみて、能楽殿にかけつける。名古屋も徳川園のぼたんはこれからだろうとよそ事を思いながら、足は熱田に向う。「邯鄲」(泉嘉夫)のあと、狂言「萩大名」(又・友・礼)をみる。これはおちついた、品のよいでき。掃路につく途中まだ少々時間があるので、松坂屋の横道から、にぎやかで落書一杯の日曜遊歩道を横切り、丸栄の東海伝統工芸展に立ち寄る。船田康代さんの人形「お松どん」がすばらしい。これで、こころばらく胸つまる思いがすっかりおきたような気がした。実はこれには訳がある。四月には道成寺の演能が二回ありました。十一日は大倉流小鼓・久田舜一郎君の披露。久田君はこの登竜門を大過なくパス。下旬には奈良金春会での「永室」(花月)の二番を勤める活躍ぶり。十七日が梅若猶諷会で杉田合子さんが福井啓次郎氏の小鼓で乱拍子をふむ。「道成寺」の舞える能愛好者の杉田さんは仕合わせな方だとおもつた。まいおわって、全編陰々として暗い道成寺で、鬼気・爽かき・明るさ・匂い・情





昭和46年6月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町6/2  
 井上重兵衛方 電(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(431)7445

### 狂言人語

梅雨空の下、しと／＼と降る雨に和し、或いは雨にしみ入る様に、或いは雨を絶ち切る様に、鼓の音は高く、低く響き渡ります。鼓一筋にかけた八十年、今年めでたく米寿を迎えられた田

ととなり、どうやら当地に根をおろして参りました。

今回は大蔵流から宗家弥太郎氏、善竹忠一郎、圭五郎両氏、和泉流からは宗家保之氏、野村又三郎氏を初め共同社総力を挙げて別掲(七月の予告参照)の通り開催します。狂言五番、いづれもポピュラーな、皆様にはお馴染深い

## 暑中御見舞

昭和四十六年盛夏

鍋惣太郎氏の記念祝賀会が豪華な催しで開催されました。本当におめでとございませう。能楽会の長老として、とりわけ中京能界の重鎮として、氏の足跡はそのまゝ今日の斯界の発展に巨大な光を投げかけて来られました。まだく氏にはやっていたゞきたいことがたくさんあります。どうか今後ますますくお元気で御活躍下さいませよう心からお祈り申し上げます。

狂言ばかりです。狂言をもっとく多くのの人々に見てもらいたい、狂言の持つ面白い笑い、鋭い諷刺、ほのぼのとした人間愛、このすばらしい狂言をもっとく多くのの人々に知ってもらいたいと願って演じ続けて参りました。狂言の普及発展を願ってお贈りする今回も、或いは狂言会としては変りばえのない番組立てと見られるかもしれませんが。しかし狂言の代表作、最もポピュラーな狂言をとり揃えた。今回は初めて狂言を御覧になる人にも、またすでに幾度も同じ

## 狂言共同社 名古屋和泉会

### 六月の催能

- 六月五日 熱田祭協賛奉納能
  - 一部 前十一時始
  - 能 玉 葛 鬼藤 嘉男 西村 欽也
  - 間 竹腰 勝一
  - 狂 伯母ケ酒 佐藤卯三郎 井上松次郎
  - 二部 午後二時始
  - 能 小鍛冶 柴田 収武 高安 滋郎
  - 間 井上礼之助
  - 狂 竹生鳥参 野村又三郎
  - 六月六日 田鍋惣太郎師米寿記念会
    - 能 鷓鴣小町 山本 博之 宝生 弥一
    - 能 舟弁慶 宝生 英雄 宝生 弥一
    - 間 茂山千之丞
    - 狂 素袍落 茂山 千作 茂山 正義
    - 間 田鍋惣太郎師米寿記念能
    - 能 羽衣 土蜘蛛 他
    - 六月十三日 青陽会
      - 能 清 經 加藤丈太郎 高安 滋郎
      - 能 井 筒 佐藤 太俊 西村 欽也
      - 間 大野 弘之
      - 能 天 鼓 網世 静夫 高安 滋郎
      - 間 井上礼之助
      - 狂 文山賊 佐藤 友彦
      - 間 田鍋惣太郎師米寿記念乱能
      - 六月十九日 観世会
        - 能 巴 橋岡 久共 谷田宗二朗
        - 間 佐藤 友彦

曲に接しておられる愛好の人にも、必ず御期待に背かぬ番組だと信じております。

今後狂言の稀曲、難曲、新作へと積極的に研究、発表、それを支えて行ける狂言会として育てて行くためにも、一層の狂言の普及、発展に力を尽くす所存です。どうかよろしくお願ひします。

### 狂言解説

- 能 三井寺 大槻 秀夫 高安 滋郎
- 間 井上松次郎
- 能 郎 鄙 観世 寿夫 西村 欽也
- 間 野村又三郎
- 狂 空 腕 野村又三郎 井上礼之助
- 六月廿六日 和調会
- 六月廿七日 宝生会
  - 能 小 督 宝生 英雄 高安 滋郎
  - 間 佐藤 友彦
  - 能 三井寺 辰巳 孝 西村 欽也
  - 間 佐藤卯三郎 佐藤 友彦
  - 狂 お冷し 井上松次郎 井上礼之助

素袍落し急に伊勢参宮を思い立った主は伯父の許へ太郎冠者を誘いの使にやりました。伯父に酒をふるまわれた上、参れぬから代参にと結構な素袍まで拝領した冠者、ほろ酔機嫌で帰る途中様子を来た主と出逢い、あわてて素袍をかきました。

鬼 瓦川永の在京に訴訟ことごとく叶って近日本国へ下ることになった大名、お礼参りに因幡薬師へ出かけました。堂の造りに見とれていた大名、突然泣き出しました。大名の指さす方向に目をやるといかめしい鬼瓦がくわつと目を見ひらいてにらんでいます。

三人片輪博奕ですってんてんになった三人男、或る有徳人が片輪者を召抱えるとの高札をたてたを幸い、めいめい片輪者に化けてまんまと召抱えられました。さて主が留守をあずけて外出すると、三人は正体を現して酒盛を始めます。

### 狂言念々

野村 広二  
 五月下旬、泰山木の白い大きな花が

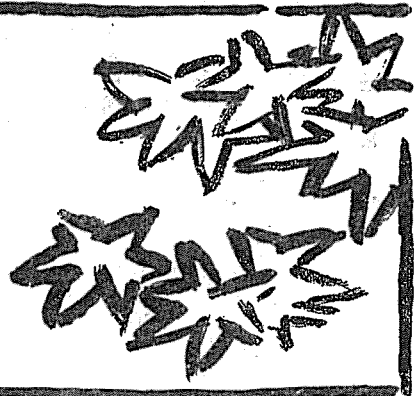
咲きはじめる。微風にのってかぐわしい匂いが家のなかにも入ってくる。近所の黒いぶちのめす猫が縁側に人なつくくのうのと寝そべる。青葉のつやが目を射る。網戸越しにそんな明るい外を眺めていると、あわただしい時の流れを忘れてしまう。先き頃求めた、「オデューッセイア」(上、呉茂一訳、岩波文庫)も「オンアン」(ケルト民族古歌、中村徳三郎訳、同)も、大学で懇ろに教わり、最近物故された英文学者富田彬先生訳の「白鯨」(H・メルビル、角川文庫)も手にとっただけで、ぼんやり、考え込む余暇が多い。老年を迎えて、改めて生死の公案に対するよりも、行住座臥の充実を目ざすにしくはないと思ひながらも、何とも心の弓矢もゆるんだ今日この頃、能楽界のあわたたしきについていけないような物倦さをおぼえる。こういうときこそ、狂言や能をみ、笑い、幽玄や花の理論の究明をやめてはなるまい。同じ本の同じ夏を何度も開け、つとめて能楽堂通いを試みる。おもしろさ、楽しさがなくとも、これはわたくしに与えられた命題ぞといいきかせ、砂地を重い靴で歩くような日であっても、ごく少しづつでも進む。またふみこたえる。そしておかしさと美しさに心はづませたのが、「鷲」(喜多夷)「撰持」(六郎)「芦刈」(猶義)「道成寺」(大西信久)「天鼓」(金春信高)「棒縛」(千五郎・千之丞・善竹十郎)「鎌腹」(万之丞・又・万作)「金岡」(藤九郎・保之)などの能や狂言といえよう。たっぷりとして重く、爽かな味、たまらないおかしさと風格。

谷川徹三先生の「芸術のみかた」(磯部書房)と「花鏡」のどこでもよい、くりかえし開いて音読する。そんなとき五月三十日の田鍋惣太郎氏米寿記念、日賀寿能の二日目を迎え、「鷲」(喜多夷)の見事さ、眼目の「道成寺」(シテ・大西信久、小鼓・田鍋惣太郎)の佳さと(金岡)、(藤九郎・保之)の風情にたんのうしたあと、藤田六郎兵エ、井上松次郎両氏と久方ぶりに、私小説的な内容だったが、能芸の伝承のこともまじえて、いろいろな話をかかず。しみじみとしたひととき、心は爪のように広々とした空へ舞い上っていくみたいであった。当日、八十八才で道成寺の小鼓を打ち、また六月六日には、老女物「鸚鵡小町」をつとめられる田鍋翁の前途がますます開けますようにお祈りしたい。さて、五月二十八日、作り物担当の太田一三老人が他男。今年五月一日の熱田神宮の舞楽神事であえなかつたが、昨年は同席で長谷晴男権宮司の「陵王」を青葉に明るい日射しの下で拝見した。日賀寿能のときは勿論幽明を異にしていた。老人は狂言や能をみると、古風な眼鏡越しの目が一見のどかそうで、鋭く光る。しかも楽しさを失わない。毎年日展をみにでかけ、かえりには、かならずNHKへわたくしを訪ねてくれました。受付もベレー帽のおぢいさんで通っていた。数代前のA局長とは格別親しく、時折りたづねては、お茶受けにでる大好物のおちよほをおぼるのが楽しみであつたらしい。あうと例の、「作り物」の苦心談をきく。こつこつと作ってはため、また己を知る人に寄

贈していたようである。あの小さな能の作り物の寸法を、ひきのぼすと、舞台で使う大きくなることであつた。かつて、随分つくりだめた百をはるかにこす、二百前後にもならうか、多くの作り物を、どこか参考資料におくるところはないかと相談をうけた。熱田神宮能楽殿用とは別であることはいうまでもない。しばらく待ってほしい、どこえもやらぬようにと念を押し、東京の知人と名古屋はM教授にお話しするのに少しの時がたつた。その間にたつての望みから、南山大学へおさまることになった。それからまたこつこつと作りためた百を越す作り物が名古屋はM教授(名古屋大学)の許へもらわれていった。見事なできばえに、どちらにもみる人の目をみはらせた由。また東京からは時経て、早稲田の演劇博物館(後藤漱氏)より待望の話がわざわざ電話で知らされたときはそれだけそるわなく、老人の手許にもなかつたので、お断わりするより仕方のない仕儀となつた。それが、この四月、もう三組、生あるうちに作りたい、一組はあらためて熱田さんへ、もう一組は自分の家に、もう一組はという元気なことをばをうけて、これはわたくしが譲り受けて、早稲田の演劇博物館へ太田老人奇贈ということと話し、お互いやれやれと心から笑いあつたばかり。それも永久にできなくなつた。昨年奥さんを亡くした老人は、さだめて、泉下でおい、いきましたぞとよびかけ、いつもそばをはなれなかつた黒い犬・熊の頭をなでていることである。最後にあつたのは、猶諷会の道成寺のときであ

司子茶  
南茶茶館

中区丸の内一丁目五ノ二三  
(31) 五七六九



る。鉢植用の定家葛をもらつてもらつたり、M教授の招待で老人夫婦と会食をして波瀾万巻の生涯をきかせてもらつたり、狂言や能のできを一言でずばりと語り、能舞台にでる作り物をつくるのが楽しみそのものであった姿、あの「腰折」の祖父(おおじ)のようにやや腰のまがった老人のなつかしい姿はいまはない。いただいた三井寺のかわい鐘をならしながら、玉のようなきれいな音をしづかにきく。能楽殿には竣工の三十年十月の秋から。享年七十八才。老人夫婦の冥福を厚く念じた

今年海外能第一陣(アメリカ・カナダ)に名古屋から、河村総一郎・野村又三郎画氏が参加、活躍の由。河村氏より盛会であったカーネギーホール四十頁に余る大部のプログラムをみせてもらう。いまは寛敏一氏が第二陣(ヨーロッパ)に加わり旅立っている。第一陣におとらぬ活躍を期待したい。次は大蔵流狂言会がおこなわれたこと。共同社にも愛好者を集める大声会がある。これを長く存続させて愛好者をふやし、やがては大蔵・和泉両流合同の愛好者大会を名古屋で開き、仲よくそのわざを競い、狂言の道が一般の人の間でも伝えられていくように切に希望したい。その日がいつくるであらうか。そして、上半期の共同社の活躍は例年にまけないものでした。「末広」(松・礼・弘)「井籬」(卯・松・秀)「萩大名」(又・友・礼)「通円」(又・松・鬼頭秀雄)など印象にのこる。能では、期待した近藤三三氏の「景清」と「春日竜神」(金剛殿)、狂言では、「土筆」(善竹忠一郎)をみそこねた。それにしても、五月中旬、近藤三三氏が病氣養生中と東京のS氏よ

りいただいたよりで知る。ご快愈を祈りたい。

放送は、「藤戸」(寿夫)「双紙洗」(蔵)「本曾・願書」(久馬)をきき、「いろは」(野村武司、万蔵)「しびり」(野村良介・万蔵)「鷲」(観世清和)「悪太郎」(万蔵・藤九郎・万之丞)「土蜘蛛」(元昭・景英ほか)に「日本の美・さくら」(桜川三部作 森田鉦平、放送はいづれもNHK)をみる。本は、「孫の観世左近」(沼艸雨、観世五月、観世左近三十三回忌追善特集)「左近元滋の存在」(北岸佑吉、同、どちらも佳稿)「二つの花・風姿花伝と花鏡」

薪能

第六回 午後 五時三十分始

昭和四十六年八月七日(土)

吉野天人	杉村 竹翠	西村 欽也
大野 弘之	大野 弘之	大野 弘之
吉田 義久	高安 滋郎	高安 滋郎
鈴木 義久	高安 滋郎	高安 滋郎
野村又三郎	井上礼之助	井上礼之助
井上松次郎	井上礼之助	井上礼之助
佐藤 秀雄	佐藤 秀雄	佐藤 秀雄
佐藤 秀雄	佐藤 秀雄	佐藤 秀雄

不合理や不可能

西村 弘 敬

吾々が日常語って居る謡や、舞台の上で演じて居る能、狂言などの筋書には、何気なく語ったり見たりして居る一向に気にも留めず過ぎて居る事が多いのであるが、少しく気をつけて考へて見ると随分奇妙な事柄やら、或は到

と」(島津忠夫、芸術史研究三三三号)「能面にみる中間表情論」(中村保雄、同)「序の力」(朝日標的欄・破魔弓、五・二五)「選集抄」(岩波文庫、熱田の社参詣と江口の遊女の歌ほか、四八・一)「随想」(山本修二、英語青年五月、故野上豊一郎・香西精両氏のことも)「名古屋芸術史・前編」(尾崎久弥、名古屋文化財叢書五一号、尾張連浜主・舞楽、東岸居士、金春八左エ門浄元、藤田清兵衛と代々・能管、萩野知一検校・平曲の項ほか、後編・伊勢門水など続刊)「わが歌舞伎・狂言物」(三宅藤九郎、演劇界五月、未見)ほか。

これから、熱田神宮奉納能、朝日狂言会、能楽友の会記念能、薪能日本能楽会能、大衆能などのおこなわれる夏の行事もいそがしい。長雨と炎暑にたえて、観能の楽しみを十分味わいた

底有り得ない不可能の事柄が、相当沢山ある様に思はれる。謡や狂言の筋書には歴とした史実に依つて書かれてあるものもあるが、又全然作者の自由意志即ち想像力による作り事、即ち「フイクション」で現実には有り得ない事不可能なる事柄やら、或は不合理極まる事などが出来て来て、語って居ても又演じて居ても、何共おかしい感じにな

る事があってやりきれない思いがする時もある。之等の例は随分沢山あるが其一、二の例を挙げて御参考に供する、彼の良く謡はれる謡に鉢の木「くせ」の中にある松はもとより常盤にて。薪となるは梅桜。切りくべて今ぞ御垣守」とあるが、此曲の出来たる当初の文句は「松はもとより煙にて。薪となるはことわりや」であつたが、徳川時代になつてから將軍家即ち徳川家はもと松平姓より出たので、松が薪となつて燃えるのを遠慮して前の方の文句に替へて語つて居たもの様で、現今或る流儀では元の文句即ち松は元より煙にての元の方へ戻して居るものもある。此替えた方の文句は実情とは合はずして、松は青々とした常盤木なれども火に燃やせば良く燃るが、梅や桜の盆裁は生木では到底燃へず、焚火にはならぬので之れは文句を替へぬ先の方が実話に合ふ事となり不合理の一例である。次に成陽宮の能に燕(ゑん)昔の支那の一部の小国から秦(しん)の始皇帝を亡ぼさんとて刺客(暗殺者)荆(けいか)秦夫陽(しんぶよう)両人が猛将(はんねき)の首と燕(ゑん)の国の地図を持ち、秦の皇帝に謁見して之れ等の品を見せ、地図の箱の底から短刀を取り出し皇帝の胸倉をとり短刀を胸元へ突きつけたが、皇帝は華陽夫人(かようぶにん)に琴の秘曲をかなでしめたので、両人は此の秘曲に魅入られ(みいられ)こんこんと眠に襲はれて眠つて居たので、皇帝は両人を跳ねつけ遂に両人を切り殺し難を逃れた、之れは支那の史書に出て居る事であるが

之れなどは短刀を突きつけながら琴を聞くなどは、いかに戯曲ながら余りに慾長きに過ぎ緊張味を欠くので不合理一例といへると思う、此の外不合理不可能な例はいくらもあるが狂言には斯様の例は随分多くある様に思へる。

七、八、九月の予告

七月 四日 調友会 午後一時始

能 葵 上 梅若 猶義 高安 滋郎

狂 葵 上 梅若 猶義 高安 滋郎

七月十一日 朝日狂言会 午後一時始

鼻取相撲 佐藤 秀雄 佐藤 友彦

悪太郎 善竹一忠郎 善竹圭五郎

水掛鯉 佐藤卯三郎 大藏弥太郎

千鳥 大藏弥太郎 善竹圭五郎

武 悪 和泉 保之 井上礼之助

七月十八日 能楽ノ友五週年記念能

能 翁 殿島修二 千歳 水藤 又吉

半能 養 老 観世 武雄 高安 滋郎

能 羽 衣 内藤 泰二 西村 欽也

能 乱 泉 嘉夫 高安 滋郎

狂 鬼 瓦 佐藤卯三郎 井上礼之助

七月二十四日 梅猶会袴能

能 百 寿 梅若 猶義 高安 滋郎

八月十五日 日本能楽会 午後一時始

八月廿二日 金 春 会

九月 五日 大 衆 能 於文化講堂

九月十二日 先代観世宗家追善能

能 清 経 観世 元昭 西村 欽也

能 碓 観世 元正 宝生 弥一

能 正 尊 観世 喜之 高安 滋郎

狂 悪太郎 和泉 保之 井上松次郎

九月十八日 麦ノ会

能 菊 慈童 長田 颯 西村 欽也

能 女 郎 花 衣斐 正宜 高安 滋郎

狂 磁 石 野村又三郎 井上松次郎

九月十九日 中部金剛会 午後二時

能 小 袖 曾我 豊島 訓三

能 三 井 寺 金剛 殿 西村 欽也

狂 雁 磔 佐藤卯三郎 井上礼之助

九月廿六日 藤 門 会

五月号(第百卅四号)に登載しました

た鐘櫃に、大臣の位や緑袍を贈られた

のは、玄宗皇帝の伯父に当る唐の高祖

皇帝でありましたので謹んで訂正致し

ます。

昭和四十六年八月十五日(日) 午後一時始  
於 名古屋 熱田神宮能楽殿  
重要無形文化財能楽総合指定 第二回  
社団法人 日本能楽会  
主 催 社団法人 日本能楽会  
後 援 文 化 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部  
名 古 屋 公 演  
名 古 屋 能 楽 会

観世流 半 番 組  
観世 元正  
岡次郎右衛門  
佐藤 秀雄  
後見 柴田初太郎  
武田太加志  
地謡 河村 鉦二  
加藤 丈太郎  
林 杉村 甲子夫  
梅田 邦久  
観世 武藏  
大槻 文藏  
衣斐 正宜  
前田 忠茂  
内藤 俊彦  
吉田 俊彦  
藤田六郎兵衛

仕舞 車 僧  
宝生流  
野 守  
柴田初太郎  
鬼頭 八郎  
野村又三郎  
佐藤卯三郎  
井上礼之助  
野 頼 政  
観世 喜之  
大槻 秀夫  
武田太加志  
宝生 九郎  
田鍋惣太郎  
野 川 宮  
大槻 秀夫  
武田太加志  
宝生 九郎  
田鍋惣太郎  
野 川 宮  
大槻 秀夫  
武田太加志  
宝生 九郎  
田鍋惣太郎

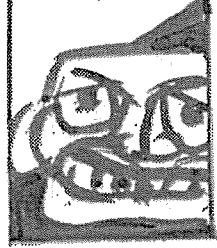
能 宝生流 望 月 間  
高安 滋郎  
井上松次郎  
河村総一郎  
田鍋惣一郎  
後見 前田 忠茂  
衣斐 正宜  
地謡 稲川 寿一  
竹腰 勝久  
鬼藤 義久  
鈴木 義久  
大坪十喜雄  
内藤 泰二  
戸田 秀雄  
森田 光春  
観世 元信

附 祝 言  
指定席 一、五〇〇円 自由席 一、〇〇〇円  
各出演楽師宅 各アレイガイド  
名古屋市瑞穂区弥富町月見ケ岡四三  
能楽協会名古屋支部  
田鍋惣太郎方 (八三二二七〇二)

能 宝生流 望 月 間  
高安 滋郎  
井上松次郎  
河村総一郎  
田鍋惣一郎  
後見 前田 忠茂  
衣斐 正宜  
地謡 稲川 寿一  
竹腰 勝久  
鬼藤 義久  
鈴木 義久  
大坪十喜雄  
内藤 泰二  
戸田 秀雄  
森田 光春  
観世 元信



# 狂言



昭和46年9月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中央区奥門前町5/2  
 井上重兵衛方 電話(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電話 48177445

## 狂言人語

台風、集中豪雨、毎年決って繰り返されることですが、天災とやら人災とやら、被害に見舞われてからいつも取り沙汰されることです。被災地の皆様には心から御見舞い申し上げます。

さて、私達名古屋狂言共同社ではこの度、共同社設立八十年を迎えるに当り、爰に皆様への感謝の念を込めまして、記念の会を催すことになりました。

名古屋の狂言は和泉流の中心として尾張藩祖義直の時代より隆盛を誇って来たものですが、明治に入ってから宗家八代目山脇和泉元賀(明治九年七月没)、四代目早川幸八(明治十年七月没)、山脇弟子家九代目得平(明治十一年三月没)らが相次いで没し、さらに九代宗家山脇元清が十四年には上京するという逆境の中で、残された弟子達が名古屋狂言の伝統を守り、その発展の為に一致協力して芸の研究上達をめざして集ったものです。爾来八十年、今日に至るまで先人達の努力もさることながら、名古屋市民の皆様

同、皆様の御理解ある御支援に深く感謝申し上げますと共に、これを新しい一歩としてさらに狂言の普及、発展に微力ながら精一杯の努力を致す所存でございます。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

※今回の和泉会には能「橋弁慶」「石橋・連獅子」を加え、能二番、狂言四番の豪華なものです。中でも話題は大曲「釣狐」の上演でしょう。俗に狂言師は「猿に始まり、狐に終る」と申します。即ち幼少の頃「靱猿」の小猿で初舞台を踏んだ狂言師が、永年の修業を経た後にその総仕上げとして演ずるのがこの「釣狐」であり、「花子」と並んで最高の重習とされています。

眷族どもをことごとく釣り捕られた一匹の老狐が狸師の伯父伯蔵主に化け殺生の罪、狐の執心の恐ろしさを説いて狐を釣ることを思いとどまらせ、罾をいったんは捨てさせたのですが、罾路で罾と知りつゝも餌にひかれ、遂にはどうにも耐えられなくなって正体をあらわし罾にかかるとのことになってしまいます。

「狂言不審紙」にも「五蔵六腑の習、其外十八条の口伝秘密有、猶委敷は執心して相伝の時を得て尋知すべし」と

述べられており、幕離れの瞬間から秘事口伝に満ち、姿勢も両脇を脇に、両膝は相互にぴったりつけたまま離すことはならず、さらに畜生足として足指の先は強く内へ曲げたままの姿勢を保たねばなりません。相当の体力と氣力が必要とされ、若い人ですら充分の期間の稽古を積み重ねば出来ないものと云えます。

今回八十年記念して共同社の長老佐藤卯三郎が松次郎の釣手を得て、この一時間半に及ぶ大曲に挑みます。同人の積年の修業の成果を是非御覧いただきますようお願い申し上げます。

## 九月の催能

- 九月五日 大衆能 於文化講堂
- 九月十二日 先代觀世宗家追善能
- 能 清 經 觀世 元昭 西村 欽也
- 能 碓 親世 元正 宝生 弥一
- 能 正 尊 井上礼之助
- 能 間 觀世 喜之 高安 滋郎
- 能 惡太郎 和泉 保之 井上松次郎
- 能 野村又三郎
- 九月十八日 表ノ会
- 能 菊慈童 長田 颯 西村 欽也
- 能 女郎花 衣斐 正宜 高安 滋郎
- 能 間 佐藤 秀雄
- 能 碓 石 野村又三郎 井上松次郎
- 井上礼之助
- 九月十九日 中部金剛会 午后二時
- 能 小袖首我 豊島 訓三
- 能 間 佐藤 友彦

- 能 三井寺 金剛 殿 西村 欽也
- 能 間 大野 弘之 井上松次郎
- 能 雁 碓 佐藤卯三郎 井上礼之助
- 佐藤 秀雄
- 九月廿六日 藤門会

## 狂言解説

釣針Ⅱ末だ定まる妻を持たぬ主従、揃って西の宮の夷三郎に祈誓をかけ、申し妻をした所、宝物の釣針を授かりました。早速冠者は拍子にかゝって奥様腰元衆、そして自分の妻を釣り上げましたか……。

悪太郎Ⅱ大酒呑で乱暴者の悪太郎、今日も伯父の所で酒を呑み、路次で酔いつぶれているのを、伯父は悪太郎の姿形を変え、今日よりは南無阿弥陀仏と名付くると云残しました。夢現に聞いた悪太郎、気が付くと付いたばかりの新しい名を呼びながらやって来る者が居ります……。

磁石Ⅱ遠江の国から都へ奉公に上ろうとした田舎者、都近くで人買いにだまされ、まさに売りとばされんとした所、鳥目をかすめとって逃げましたが太刀をふりかざした人買いに追いつめられました。男はとっさの機転で「吞まう」とやり返します……。

雁磔Ⅱ野へ狩に出た大名、雁を見つけて弓矢でねらいすまさんとした所、通りがかりの通行人が先に磔を投げて倒してしまいました。さあ大名は「俺が先に狙い殺しておいた雁だ」と云い張りきりません……。

狂言念々

野村 広二

この夏の能界は、狂言や能の両部門とも、春や秋とおなじように、なかなか活潑。能関係では山崎正和氏の二作品が内外の反響を呼んでいるが、狂言も、東のあとりの会別会、西の狂言小劇場の発表会が話題をまいているようです。

七月のあの大雷がとどろくとどろり渡る日は能楽の友五周年記念能があったけれども、行くに行かれず困ってしまつた。この会も新能も盛会の由、新能は月のきれいな夜であつた。青少年芸術劇場能楽公演(文化庁)も満席。青年諸君が横道万里雄氏の流麗な説明を熱心にききながらなごやかに狂言や能・藝上(金春信高)を鑑賞する姿は楽しい。

狂言は大蔵流で二番。「武悪」(大蔵弥太郎・山本則寿・則直)は先き頃和泉流でみたのところがった演出と味があつて興味が深かつた。見学者が六つこたえるアンケートの集計の結果が期待される(愛知県教委文化財課)。八月十五日、名古屋で三回目的日本能楽会能も催される。観世流と宝生流に狂言は和泉流。名古屋能界の夏もいそがしい。さてこの頃、訳あつて能楽選集(岩波文庫、野上豊一郎編)と口語訳世阿弥十六部集(小西堪一、現代語訳、日本古典文学全集、河出書房)を求めたが、もちろん「世阿弥」の方は古本をさがした。入用のときはなかなかみつからない。あの末尾の四十頁にもわたる長い名解説を、狂言の好きな方によんでもらいたかつたのです。岩波のこの「能を読む本」とともに、こちらもいま在庫がなく、古本でも探し出せず

ある日たづねた顔見知りの古本屋の主人から、逆にこの本はいままでいていませんねときかされた。どうしてもほしい本が手に入らないと何とも落ちつかない。根気よく古本屋を廻つてさがしたすことである。放送(NHK)は「黒塚」(松本恵雄)「鶴飼」(松本謙三)「瓜盗人」(大蔵弥太郎)。本は「ノエル・ペリーのこゝろ」(古川久、学鑑七月)「フイレンツェの山崎正和作・世阿弥」(朝日、七・二二夕刊)「オイディプス王評」(山崎正和潤色、観世寿夫ほか出演、森秀男、東京、八、二二夕刊)。

九月は故観世左近追善能が催され、越えて十月には名古屋和泉流が狂言共同社を結成して今年が八十年目に当るので、その記念狂言会がおこなわれる今年の秋に対する期待は大きい。お詫び。六月号で後藤淑氏が後藤淑氏になっていました。訂正してお詫びします。

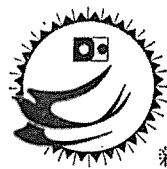
十月の予告

- 十月三日 九華会 午前九時三十分始
  - 能 蟬丸 後藤 鈴子 高安 滋郎
  - 間 後藤 新蔵
  - 能 舟弁慶 吉田 定三 西村 欽也
  - 間 佐藤 友彦
  - 能 萩大名 井上礼之助 佐藤 秀雄
  - 間 井上松次郎
  - 十月九日 修護会 囃子会
  - 十月十日 和泉会
  - 能 橋弁慶 河村 鉦二
  - 間 和泉 保之 野村又三郎

狂 三本柱 和泉 保之	狂 腰折 三宅藤九郎	狂 釣狐 佐藤卯三郎	狂 引括 井上礼之助 佐藤 秀雄	半能 石橋 内藤 泰二 辰巳 孝	能 融 伊藤 長八 高安 滋郎	間 佐藤 友彦	十月廿三日 新作能と新作狂言の夕	能 女と影 泉 嘉夫 高安 滋郎	狂 濯ぎ川 茂山千五郎 木村 正雄 茂山 千作	十月廿四日 名匠鑑賞能 午後一時始	能 小鍛冶 泉 嘉夫 西村 欽也	間 大槻 文蔵	能 定家 大槻 秀夫 西村 欽也	能 狸々乱 鈴木 一雄 高安 勝久	橋岡 久馬	狂 狐塚 井上松次郎 佐藤 卯三郎	間 井上礼之助	十月卅一日 青陽会	能 野守 高橋 瞭一 谷田宗次朗	間 井上礼之助	能 放下僧 河村 鉦二 西村 欽也	間 佐藤 卯三郎	能 隅田川 柴田 牧武 西村 欽也	能 菊慈童 山本 勝一 西村 弘敬	狂 瘦松 佐藤 秀雄 佐藤 友彦
-------------	------------	------------	------------------	------------------	-----------------	---------	------------------	------------------	-------------------------	-------------------	------------------	---------	------------------	-------------------	-------	-------------------	---------	-----------	------------------	---------	-------------------	----------	-------------------	-------------------	------------------

11月21日 <日>

名古屋に本格派のショッピングセンターが誕生して、もう一年!



新しい生活がある街

ダイヤモンドシティ 名古屋ショッピングセンター

ダイヤモンドシティはお店が150店  
 ボーリング場もプールもあるショッピングセンターです。

営業時間	—	月曜	定休	日
ショッピング	—	10時	→	19時
地下味の名店街	—	10時	→	20時
ボーリングセンター	—	9時	→	24時
プール	—	11時	→	20時
医療センター	—	10時	→	18時



昭和46年10月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区裏門前町6/2  
 井上重兵衛方 電話(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電話 481) 7445

### 狂言人語

ぐずついていた秋雨前線もどうやら去り、天気図から消えることのなかった台風もこのところ姿を見せなくなりました。いよ／＼本格的な秋のおとずれです。行楽の秋、そして何より芸術の秋です。文字通り秋を彩る多彩な催しが目白押しに計画されています。

十月三日は狂言共同社結成八十年記念として和泉会が開催されます。共同社の最長老として共同社の歴史をその身にきざみ込んで来た佐藤卯三郎の「釣狐」を中心に、宗家保之氏の「三本柱」、三宅藤九郎氏の「腰折」、さらに観世流能「橋弁慶」に間狂言の「鼓師」、宝生流能「石橋・連獅子」を加え、共同社総出演で「引括」という豪華、多彩な番組です。是非御来聴いただきたく存じます。

十月二十三日には「新作能と新作狂言の会」が催されます。新作能「女と影」はフランスの劇作家、ポール・クロードの原作になるもので、クロード自身が「これは一種の能である」と語っているように、幽玄を根本理念とする能にふさわしい内容です。原作の上演は本国フランスでは一度も行わ

れておらず、かえって日本で新作能として泉嘉夫氏を中心にして／＼上演され、その評価を高めております。

新作狂言「濯ぎ川」は、フランス中世のフマルス(喜劇)「洗濯桶」からヒントを得て劇作家飯沢匡氏が、最初から狂言風に書きおろしたものです。昭和二十八年七月初演に当って、武智鉄二、北岸佑吉両氏と出演の茂山千五郎(現千作)、七五三(現千五郎)、千之丞ら、専門狂言師らの手を加え上演されていらい今日まで／＼上演され、新作狂言の中でも成功している代表といえましょう。何もしらないで見ていると、とても新作とは気がかないほどで、特に関西では茂山千五郎氏らを中心として上演回数を重ねられ、すっかりおなじみとなっているほどです。

新作狂言というと、とかく大上壇にふりかぶり、現代的な意味、テーマをそれも露骨にたくさんもり込もうとしては結局失敗している例が少なくありません。この「濯ぎ川」などは、それが狂言の器に合うようにほどよく盛り上げているのが成功していると云えます。よう。御期待下さい。

なお同日は国文学者、高木市之助氏の講演が予定されています。

その他、今月は観世喜之氏古稀祝賀会(三日)、名匠鑑賞能(二十四日)、青陽会(三十一日)とともに豪華な催しが予定されております。どうか御期待下さい。

### 十月の催能

十月三日	九阜会	午前九時三十分始	能 蟬	後藤 鈴子 後藤 新蔵	高安 滋郎
十月九日	修護会	唯子会	能 舟弁慶	吉田 定子 中村 友彦	西村 欽也
十月十日	和泉会	共同社結成八十年記念会	能 三本柱	和泉 保之	野村又三郎
十月十日	和泉会	共同社結成八十年記念会	能 腰折	三宅藤九郎	三宅 右近
十月十日	和泉会	共同社結成八十年記念会	能 釣狐	佐藤卯三郎	野村又三郎
十月十日	和泉会	共同社結成八十年記念会	能 引括	井上礼之助 佐藤 秀雄	井上松次郎
十月十七日	淡交会		能 石橋	内藤 泰二 辰巳 孝	高安 滋郎
十月十七日	淡交会		能 融	伊藤 長八 佐藤 友彦	高安 滋郎

十月廿三日 新作能と新作狂言の夕  
 能 女と影 泉 嘉夫 高安 滋郎  
 能 濯ぎ川 茂山千五郎 木村 正雄  
 十月廿四日 名匠鑑賞能 午後一時始  
 能 小鍛冶 泉 嘉夫 西村 欽也  
 能 定家 大槻 秀夫 西村 欽也  
 能 狸々乱 佐藤 秀雄 西村 欽也  
 能 狐塚 橋岡 久馬 高安 勝久  
 十月卅一日 青陽会  
 能 野守 高橋 暎一 谷田宗次朗  
 能 放下僧 井上礼之助 谷田宗次朗  
 能 隅田川 河村 鉦二 西村 欽也  
 能 菊慈童 柴田 牧武 西村 欽也  
 能 瘦松 山本 勝一 西村 弘敬  
 能 佐藤 秀雄 佐藤 友彦

### 狂言解説

萩大名II冠者のすゝめで清水に遊山に出かけた大名、立寄った茶屋の亭主自慢の萩によそへてかねて用意の歌を詠むことになりました。物覚えの悪い大名と律義者の冠者の懸命のカンニングが始まりますが……

狐塚IIようやく田に稲の実る時分、主は太郎冠者に狐塚にある田の番に行かせましたが、憶病者太郎冠者は見舞に来た次郎冠者、主を狐と間違えて、次々に縛り上げてしまいました。正体を現せと松葉でいぶした拳句に二人の皮をはがんと鎌を取りに出かけます……

瘦松、また不仕合せを瘦松と云う。女一人の道中に出逢った山賊、長刀をふりかざし首尾よくいったんは仕合せをしたかに見えますが、とかく女は油断がならず結果は散々の瘦松に終わってしまします……。

### 狂言念々

野村 広二

今年も芸術祭の秋がやってきた。

さて、今月は名古屋和泉流が狂言共同社を結成して八十周年を記念する狂言会が催される。悉くはこの「狂言」第百号記念特集号を、お読みになっていただくにわかれるが、明治二十四年六月、家元なきあとの名古屋のおも立った狂言師数名がこれをつくる。同じ和泉流ながら各派別々に狂言会をつくらず、舞台をふまず、共同社同人として狂言を勤めるように大綱をきめた。狂言上演のもとになる波形・雲形本は現存。和を以てすむ。しかも個性を相殺することのないように。以来八十年波浪高くまた、波風おさまる明治・大正・昭和の三代を悪戦苦斗、栄枯盛衰上演の苦心にわが家の門をくぐる足の重いとさきも、また春風駭蕩のこともあったであろう。当時の東西では、二十三年、東京芝能楽堂で行啓能、京都で天覧能、二十四年、先代宝生九郎が初めて関西へ、金剛舞台に立つ、二十五年、喜多会発足（六平太十九才）先代千作初上京。二十六年、芝能楽堂で実や伴馬ほか催能さかん。豊竹呂昇、名古屋から大阪へ、これが貴重な資料、「能楽・明治百年」（能、京都観世会館、四二・八一十）にのる記録の抜す

いによるものです。その頃名古屋ではどうであったか。大切な「小鼓芸談」（田鍋惣太郎）「演能記録—明治・大正・昭和」（名古屋能楽協会、代表・田鍋惣太郎編、旧版）によっても、記録は二十一年から二十七年にとんでわかりません。明暗さまさまの想像が湧いてきます。もっとも「狸腹鼓」（角淵）「猿座頭」（山本）「唐人相模」（田中）「鎌腹」（井上）「業平餅」（門水）など十二番が演ぜられた十七年の二日間の追善狂言会の記録に明記され、二十七年には、愛知県博物館舞台披露に清藤・六平太の名をみることで、あの前で、能界の交響があったようにおもわれる。その二日目に「翁」で三番叟・橋掛の舞を井上菊次郎がつとめ、このときの三日間の演能はめざましいものです。今はもはや発起人の方々は他界、老、壮、青、少年、三、四世代の人たちが活躍してめざましい。そして笑いの原理を老いの心から若い心へたゆまず伝えてきた、共同社諸氏の心に去来するものは推しはかり難いものがある。その特色はおだやかな味をすっきりとさわやかに表現、人生のための狂言を目指すようである。いよいよ共同社の将来が多幸であることを祈って止みません。

大衆能の狂言は「釣針」、多くの笑いを誘い、淡々とした味、おもしろかった。放送は「綾鼓」（喜之）「張良」（宝生弥一）「栗焼」（万之丞・万作）「貝尻シ」（万作）をきき、「院展」（教養特集、以上NHK）で「知盛幻生」（安田靱彦）、土蜘蛛（CBC、七一年度イタリヤ賞参加作品、ミュージカル、TBS制作）をみる。本は「能の表現」（増田正造）、中公新書「百合道成寺」（須永朝彦、中央公論・歴史

と人物、十月）「世阿弥—山崎正和」（土曜の手帳欄、貝、朝日、八、七）「オイデイブラス王、評」（矢代静一、毎日、九、七）など。十一月は共同社が大阪の故善竹弥五郎追善狂言会に「蟹山伏」（松、秀、礼）で参加。成功を期待したい。

### 十一月の予告

十一月 七日	風韻会	能 花 月	佐藤 友彦	井上松次郎	井上礼之助
十一月 十三日	一謡会	能 胡 蝶	川瀬 静子	大野 弘之	井上礼之助
十一月 十四日	尊神会	能 雲 雀 山	都筑 香里	都筑 静子	高安 滋郎
十一月 廿一日	観世会	能 自然居士	岡 久雄	西村 欽也	
十一月 廿三日	御衝会	能 紅 葉 狩	佐藤 友彦	大野 弘之	井上礼之助
十一月 廿七日	霞 会	能 鎌 腹	和泉 保之	佐藤 秀雄	
十一月 廿八日	邦謡会	能 葵 上	佐藤 友彦		

12月1日 オープン予定

明るく楽しい

【会員募集中】

スポーツ ボーリング

# 豊 明 ボ ウ ル

愛知県愛知郡豊明町（名鉄前後駅前）

電話 97-1241番

協会支部よりのお知らせ  
都筑 静子氏 雲雀山初能 竹内社中  
川合三恵子氏 草子洗初囃子 竹内社中



昭和46年11月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区奥門前町6/2  
 井上重兵衛万 電(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

### 狂言人語

秋深し、紅葉を求めて野山に遊ぶのも今しばしのことです。  
 紅葉と云えば能には「紅葉狩」という代表看板がありますが、狂言には春の花見、野遊びを扱った曲が多いのに比べ、秋の遊山を取上げたものは少いようです。そんな中にも秋をさぐれば「萩大名」の萩の花、「月見座頭」の虫の音と月、「雁礫」の雁、実りの秋の「鳴子」「狐塚」、味覚の秋は「柿山伏」「栗焼」と挙げられます。皆様も秋を捜しにさあお出かけください。

### 十一月の催能

- 十一月七日 風韻会  
 花月 渡辺 節子 高安 滋郎  
 班女 井上松次郎  
 狂柿山伏 三木美智子 西村 欽也  
 十一月十三日 一謡会  
 胡蝶 川瀬 静子 高安 滋郎  
 十一月十四日 葎神会 於 岡崎隨念寺  
 能 雲雀山 都筑 香里 高安 滋郎  
 都筑 静子

### 狂言念々

- 十一月廿一日 観世会  
 自然居士 藤井 久雄 西村 欽也  
 野宮 井上松次郎  
 紅葉狩 片山博太郎 久保田千三郎  
 井上松次郎  
 十一月廿三日 観衡会  
 和泉 保之 井上礼之助  
 十一月廿八日 邦謡会 於 岡崎隨念寺  
 能 葵 上 佐藤 秀雄

### 野村広二

十月上旬、百舌がきて鳴く。山茶花もひらきはじめる。近所に入っている植木屋のはさみの音が冴えてきこえる。みかんの黄色もようやく目に鮮か。下旬、最後の日であったが日本伝統工芸展(中村)へ、人形・くさびら(林駒夫をみにいく。狂言の「菌」である。笠をつけた三人の女の人形(梧桐壘)で舞台の上のように並べてある。会場に入って大勢のなかに谷川徹三先生のお姿をみつめる。これから常滑へ向われる直前のことで奇遇のほかはない。

### 楽師会乱能

- 昭和四十六年十二月十九日 正后始
- 菊慈童 藤田六郎兵衛 内藤 泰二 二井 栄逸 のこる。
  - 舞囃子 小袖曾我 寛 敏一 吉田 定男 服部紗枝 (K) は「三井寺」(九郎)
  - 正骨 皮 山口 義郎 竹腰 俊一 (松風)(元昭)
  - 羽 衣 寛 三男 長田 初太郎 塚本 秀雄 博太郎)「こ結成八十年記念狂言会(十月十日、第十一回名古屋和泉会)は、古屋和泉(河村錠二)と「石橋・半能・連獅子」(辰巳孝・内藤泰二)に祝われて、狂言四番。一調「松虫」が宝生英雄、田鍋惣太郎でおくられたのは、片や能楽協会理事長片や同名古屋支部長であることから、なにもにもまさる、大祝儀におもえたり、自身八十を越す高年齢ながら「釣狐」を演じた佐藤卯三郎氏の鋭くかつやわらかく淡々とした芸に共同社の狂言精神の見事な一面が開花していた。もう

一番の狂言か小舞数曲を望んだが、総体、量感、沈潜というよりも、なごやかでしやれた狂言会になっていた。新・能と狂言会の高木市之助博士の講演も、能、狂言は変わるものであること、その日本的なよさと国際性、不易流行の理を元気でかつ達に語られたが、どっしり重味を感じさせる内容で目を開かれた。九月の能は「三井寺」(金剛藏)、十月は前記の「石橋」と「乱、双ノ舞」(橋岡久馬、鈴木一雄)が印象にのこる。  
 放送(NH)は「三井寺」(九郎)「松風」(元昭)「井筒」(片山博太郎)「こ結成八十年記念狂言会」(十月十日、第十一回名古屋和泉会)は、古屋和泉(河村錠二)と「石橋・半能・連獅子」(辰巳孝・内藤泰二)に祝われて、狂言四番。一調「松虫」が宝生英雄、田鍋惣太郎でおくられたのは、片や能楽協会理事長片や同名古屋支部長であることから、なにもにもまさる、大祝儀におもえたり、自身八十を越す高年齢ながら「釣狐」を演じた佐藤卯三郎氏の鋭くかつやわらかく淡々とした芸に共同社の狂言精神の見事な一面が開花していた。もう

「世阿弥」(山崎正和)をみる。  
 本は、「細文的原型と弥生的原型」(能面のことも、谷川徹三、岩波書店)  
 「黒川能」(真壁仁、日本放送出版協会)「黒川能、評」(読書特集、十・六、朝日)「本歌取り」(坂東三津五郎、十、十一、朝日)など。  
 十一月を経て本年榎尾の十二月までよき演能を期待したい。  
 お詫び、九月号で小西甚一氏が小西

日本史探訪

